

- 1 主題名 友情 2-(3)
- 2 資料名 どうすればいいの? (自作資料)
- 3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

内容項目2-(3)は「互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。」である。「小学校学習指導要領解説 道徳編 平成20年8月 文部科学省」では、小学校高学年にこの内容項目を指導する際には「友達同士の相互の信頼の下に、協力して学び合う活動を通して互いに磨き合い、高め合うような、真の友情を育てていくことが強く求められる。」としている。この段階の児童は、相手の心を思いやりながら、共によりよく生きようとする気持ちが高まっていく。それにより、友達との絆を深め、健全な関係を築いてゆくことが一層重要になる。ややもすると、仲のよい友達との関係を重んずるがために人間関係に悩んだり、友達の考えに左右されたりして、正しい判断ができない児童も見られる。したがって、この段階においては信頼を基に、学び合いながら正しい理解と友情を育て、協力し助け合う姿勢を育てることが大切である。

(2) 児童の実態について

明るく、元気な学級である。1学期の調査では、学級に仲のよい友達がいると回答した児童が22人で、おおむね楽しく学級生活を送っている。しかし、日常生活では小さなトラブルが絶えない。次に示す友情に関する実態調査でも、昼休みに友達と遊んでいて、校長先生が大切にしていた花を友達が折ってしまった時どうするか、という質問に対し、16人が「友達を説得して、先生の所と一緒にいき、謝る。」と回答した。これらの児童は、友情及び正義感にあふれた児童であると考えられる。すなわち、一緒にいた自分も当事者であると考え、友達を見捨てず一緒に謝ろうとする姿勢が素晴らしい。ただ、これ以外の回答をした児童は、大いに友情のとらえ方に問題があると思われる。「自分には行かないけれど、友達に正直に言うようにアドバイスする」と回答した児童には、自分にも責任があるという意識はなく、あくまでも友達のやった出来事で自分は関係がないという姿勢が見受けられる。なお、理由をみても「怒られる時間を短くする」など、真の意味での反省は感じられない。次に、「黙って知らないふりをする。」と回答した児童は、責任を自覚してはいるが、問題なのは友達関係の在り方である。「友達がどうするか」が判断基準となっている傾向が見られ、指導及び改善が必要であろう。さらに、「内緒で、先生に友達がやったことを話す。」と回答し、友達とのトラブルをさけている様子がかがわれやましさをあまり感じていない児童も見られる。

☆友情に関する実態調査<平成23年10月14日実施；第5学年3組31人>

質問	
昼休みに、友達と遊んでいると、友達が足で、花壇の花を折ってしまいました。校長先生が大切に手入れをしている花です。友達は「まずいから逃げよう!」と言ったので逃げてしまいました。すると、5時間目に、担任の先生が「誰かが、校長先生が大切にしていた花を折ってしまいました。知っていることがある人は、ぜひ教えて下さい。」と聞いています。あなたならどうしますか?	
回答	
友達を説得して、先生の所と一緒にいき、謝る。 16人	<理由> 折ってなくても一緒にいたから、逃げたのが悪いかから、など。
自分には行かないけれど、友達に正直に言うようにアドバイスする。 3人	<理由> アドバイスして怒られる時間を短くするため、自分から言ったら後で怒られなくてすむ、そうした方が自分から言えるから。
黙って、知らないふりをする。 3人	<理由> あまりよいことではないが友達が行くなら行く行かないなら行かない、行ってしまおうとその友達が傷つくから、やってしまっただけで逃げてしまったのに先生にいうなんて恥ずかしくてできないから。
内緒で、先生に友達がやったことを話す。 9人	<理由> そこで言ったら友達が気付くし仲が悪くなったら困るから、みんなの前だとその友達がかわいそうだから、その人とけんかになったら嫌だから、など。

(3) 資料について

本資料は、授業者の自作資料である。持久走の得意な主人公が、「今年は少しでも順位を上げたい。」という親友の練習相手を買って出る。その姿からは、友達との絆の強さが伝わる。しかし、親友の練習に付き合うがために自分のタイムが伸びず、ライバルの追い上げにあう主人公は次第に焦りはじめる。授業では、資料のここまでを前半として先に提示する。主人公の、親友思いの発言や行動を通して、友情の大切さに共感させたい。次に、ライバルたちが記録を伸ばしているのを知り思い悩む姿から、人間の弱さに共感させ、主人公の明恵はどうするかについて児童に考えさせることで、明恵の葛藤に共感させ、ねらいとする価値について深く考えさせたい。

また、主人公の明恵が智子と電話で話す場面を、後半として授業の中盤以降に提示し、真の友情についての価値を深めたい。

4 本時の指導

- (1) ねらい
主人公の判断を理解することを通して、互いに助け合い、高め合うような、真の友情を育むための判断力を育てる。
- (2) 準備
読み物資料、ワークシート、挿絵、発問カード（掲示用）
- (3) 展開

流れ	学習活動と発問	予想される児童の反応	教師の支援
関心をもつ	1 自分たちの友情についての意識を考える。 ○仲のよい友達が落ち込んでいる時、みなさんはどうしますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・優しくしてあげる。 ・話を聞いてあげる。 ・楽しい話をしてあげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいとする価値にふれ関心をもたせる。
深める	2 読み物資料「どうすればいいの？」の前半部分を読み話し合う。 ○明恵も笑顔になったのはどうしてでしょう。 ○家に向かいながら、明恵はどんなことを考えていたと思いますか。 ○みんなから出た三つの意見のうち、自分の意見に近いものを選んでネーム磁石を貼り、話し合おう。	<ul style="list-style-type: none"> ・智子が喜んでくれて、うれしかったから。 ・友達の役にたててうれしかったから。 ・本当は、自分の練習に集中したい。 ・やっぱり、智子を見捨てることはできない。 ・二人のどちらにとっても良い方法はないかな。 ・全員、ネーム磁石を黒板に貼り、それぞれの理由を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の結末を隠すことで多様な考えを引き出せるようにする。 ・二人の絆の深さを理解できるようにする。 ・自分の記録への不安と、智子への友情とで葛藤する明恵の心情を理解させる。 ・ネーム磁石による意思表示は、話し合いを深めるためのものであり、「正・誤」や「勝ち・負け」を決めるためのものではないことを伝える。
見つける	3 読み物資料「どうすればいいの？」の後半部分を読み話し合う。 ◎明恵は、なぜ智子との練習を選んだのでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・智子が自分の事を思ってくれていたから。 ・友情の大切さに気付いたから。 ・自分のわがままに気付いて恥ずかしかったから。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>☆期待する姿が見られなかった場合の指導 ----- 個別に声かけを行い明恵が、なぜ自分のためにならない練習を続ける選択をしたのかを考えさせる。</p> </div> <p>◎友情を育むためにはどのように判断することが大切かを考えることができたか。（ワークシート、発表、観察）</p>
つなぐ	4 授業を振り返り、感じたことを話し合う。 ○友達っていいなと思った経験とその時の気持ちを発表しよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・うれしかったから、友達が困っているときは助けてあげられる人になりたい。 ・うれしかったので、友情は自分にとって大切だと思った。 ・うれしかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が、ねらいとする価値と自分の経験とを照らし合わせ、道徳的価値の自覚を深められるようにする。
	5 教師の説話及び「心のノート」P48～P49の詩の朗読を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・全員静かに、教師の説話と詩の朗読を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と助け合おうとする思いを温め、今後の発展につなぐようにする。

どうすればいいの？

今年も、持久走の季節になった。明恵が通う小学校では、毎朝、校庭で持久走の練習が行われていた。恒例の校内持久走大会に向けて、全校児童が決められたコースを走るのである。

マラソンが得意で、二年連続優勝中の明恵には、親友の智子がいる。運動好きの明恵に比べて、智子は、絵をかいたり本を読んだりするのが好きな、おとなしい女の子だった。

ある日の放課後、二人で一緒に下校しながら、智子が明恵に言った。

「あーあ、今年も持久走の季節になっちゃったね。明恵は良いけど、私は走るのが苦手だから、ゆるーうつだなあー。」

「そんなことないよ。私も走るのは苦しいし、誰だって同じだよ。」

「私、毎年、三十一位とか三十三位とかで、三十位以内に入ったこと無いんだよね。一回で良いから三十位以内に入ってみたいな。」

「そうだ、今年と一緒に練習がんばろうよ。練習の時に一緒に走ってあげるから！ね、そうすればきっと智子も走るのが速くなって、目標の三十位に入れると思うよ。」

親友の智子のことを思っただけで明恵は言った。

普段、仲が良い二人だもの、力を合わせれば、きっと持久走も乗り越えられるに違いないと思った。

次の日の練習では、二人は一緒に走った。明恵は、智子に合わせて五十パーセントくらいの力である。これなら、持久走が苦手な智子もついていける。ゴールすると、智子が笑顔えがおをいっぱいうに浮かべて言った。

「すごい、昨日よりタイムが二十秒もあがってる！やっぱり『コーチ』がいと走りやすいんだね！」

「でしょ？やっぱり、持久走はリズムが大事だもんね。明日からも、私が少し前を走るから、ついてきてね。二人でがんばろ！」

「今年こゝしは明恵が協力してくれるから、三十番以内に入れるかも！」
智子のうれしそうな笑顔を見て、明恵も笑顔になっていた。

そんな練習を続けて一週間たったある日、智子が家の都合で学校を休んだ。久しぶりに一人で走った明恵は、ライバルたちが、思わぬ力をつけてきているのを感じた。去年、優勝した明恵に次いで二位の早百合さゆりや三位の久美くみは、かなりのペースで明恵を引き離はなしていく。それに、ついこの間あいだまで、明恵よりも、ずっと遅おそかった友達も、明恵に迫せまるペースで走っている。優勝をねらうライバルたちは、それぞれの目標に向かって、着々と練習してきていたのだ。

その日の帰り道、明恵は言いようのない焦あせりを感じた。

「私、遅くなっているのかな・・・？」
しかし、次の瞬間しゆんかんには、

『今年こゝしは明恵が協力してくれるから、三十番以内に入れるかも！』

と言う親友の智子の笑顔が頭に浮かぶ。明日になれば、また智子は、自分を頼たよってくるだろう・・・。

明恵は、家へと向かう自分の足どりが、とても重たく感じた。

その夜、明恵は一人で考えた。智子との友情ゆうじようをとるのか、それとも自分の順位をとるのか・・・。なかなか、決心するのは大変だったが、

（校内持久走大会は、一年に一回しかない。ちゃんと気持ちを伝えれば、智子はわかってくれるんじゃないか。むしろ付き合ってもらって順位が下がった方が、智子は傷きずつくはず。そうだ、明日の朝、本番が近くなったから別々に練習しよう、と智子に言おう。）

そう思っていたところで、一階から母の声が出た。

「明恵、電話よ。智子ちゃんから。」

（えっ、智子？何だろう？）

そう思いながらも、階段かいだんを下りて受話器を取った。

「明恵、今日は休んじゃってゴメンね。」

「お家の用事だもんね、しようがないよ。それより明日は大丈夫だいじようぶなの？」

「うん、だいじょうぶだよ。それでさ明恵、あしたからの持久走の練習、そろそろ、二人別々に練習した方がいいんじゃないかと思って。」

「えっ・・・。」

明恵は、ドキツとした。

（智子は、私の心を見抜いてるんだらうか。ついさっきまで、私が智子に言おうとしていたことだ。）

智子は続けた。

「本番が近くなってきたでしょう？明恵は、連続優勝がかかっているし、そろそろペースを上げて走らないといけない時期じゃない。私はもう、ペースがわかったから、このままでも目標に届くと思うし。それぞれ、目標にむかってがんばるっていうのも、かつこいいじゃん？」

明恵は、言葉が出なかった。学校を休んだ智子が、今日の練習の様子を知らずがない。それでいて、優勝目指して走りたい自分の心を察して提案しているのだとおもった。

（それに引き替え自分は・・・。）

「ねえ、聞いているの？」

電話の向こうで智子の声がする。明恵は、ふと我にかえた。そして、受話器を持ちかえると智子に言った。

「何言ってるの、智子！最後まで、練習につきあうからね。ちやーんと自分の練習は別にやりますからご心配なく。」

明恵は親友の声を聞きながら、胸の中をさわやかな風が吹き抜けてゆくのを感じていた。

